

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 第 号
------	-------

氏 名 曹 秀 弦
論 文 題 目 韓 国 人 学 習 者 に よ る 日 本 語 破 裂 音 ・ 破 擦 音 ・ 摩 擦 音
の 長 さ の 音 声 的 実 現 に つ い て

論文審査担当者

主 査	名古屋大学	教 授	鹿 島 央
委 員	名古屋大学	教 授	柳 沢 民 雄
委 員	名古屋大学	教 授	成 田 克 史
委 員	名古屋大学	准 教 授	宇 都 木 昭

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

本論文は、韓国語を母語とする日本語学習者が日本語の破裂音、摩擦音、破擦音の3つの阻害音を生成する場合、これらの阻害音を含む拍の長さがどのような要因により影響を受けるかを明らかにしたものである。設定した要因は、阻害音の有声性、語内の生起位置、後続母音の種類と長短、拍数、学習レベルと既知度、ポーズの有無、および収録方法である。実験では、読み上げ課題と遅延反復課題による異なる収録方法を用いてデータを収集し、日本語母語話者による聴覚的な評定に基づき発話の不自然率を算出している。統計的検定には、分類木分析を使用し、設定した要因間の有意差、影響の強さを分析、考察している。

以下、本論文の概要と評価について述べる。

[本論文の概要]

本論文は、第1章「序論」、第2章「先行研究」、第3章「実験方法」、第4章「破裂音の長さの実現に関する実験結果と考察」、第5章「摩擦音の長さの実現に関する実験結果と考察」、第6章「破擦音の長さの実現に関する実験結果と考察」、第7章「破裂音・摩擦音・破擦音の長さの実現に関する実験結果と考察」、第8章「総合的な考察」、第9章「結論」から成る。

第1章では、韓国語を母語とする日本語学習者に対して行われてきた研究の背景、阻害音を含む拍の長さに注目した研究の必要性和意義について述べている。その上で、本研究の研究課題を読み上げ課題と遅延反復課題それぞれについて、3つの阻害音ごとに説明している。最後に、本論文の構成について述べている。

第2章では、韓国人学習者による3つの阻害音に関する先行研究をまとめた上で、それぞれの阻害音について研究結果を詳細に示している。しかし、いずれの研究でも阻害音の誤用とその原因の説明がほとんどであり、阻害音を含む拍の長さに注目した研究はあまりないことが示されている。後半では、本研究で用いた遅延反復手法の説明とこの手法を用いた理由を述べている。

第3章では、資料語、被験者、実験方法、評定方法、および分析方法について述べている。資料語は、3、4拍語の有意味語で、阻害音が1拍目あるいは2拍目に生起し、短母音/a, i, u, e, o/が後続する103語と長母音/ee, oo/が後続する44語である。被験者は、韓国慶尚道方言話者で、初級中盤レベル23名、中級レベル17名の合計40名である。実験では、1名ずつ遅延反復課題を先に収録し、その後、キャリア文に入れた資料語をポーズの有無による2通りの生成方法で収録している。その後、既知度調査も実施している。評定方法については、日本語母語話者10名が、単音の正しさ、3つの阻害音を含む拍の長さ、およびポーズの有無に注目し評定している。分析方法については、「不自然率」の算出方法と分類木分析を使用することの妥当性について述べている。

第4章は、破裂音が含まれている拍を生成する場合の結果と考察である。文字の読み上げ課題では、ポーズの有無により不自然率が高かった語と不自然率に影響を与えている要因が

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

学習レベルごとにそれぞれ異なっていることを示している。ポーズが有る場合、破裂音に後続する母音の音質も強い影響を与えている要因であったが、初級学習者では生起位置が最も強い要因であった。一方、ポーズが無く破裂音に長母音が続く場合は、初級学習者は母音の長短が、中級学習者は生起位置が最も強い要因であり、各学習レベルにより影響を与えている要因が異なっていた。遅延反復課題では、初級学習者に関しては生起位置の影響が最も強く、その中で1拍目と3拍目に破裂音を含んでいる語は拍数の影響もあったが、中級学習者に関しては影響を与えている要因は無かった。

第5章は、摩擦音が含まれている拍を生成する場合の結果と考察である。文字の読み上げ課題では、ポーズが有る場合、両学習者に最も影響を与えている要因は摩擦音の有声性と調音点であった。摩擦音の有声性と調音点以外の有意な要因は、学習レベルを問わず、短母音が続く場合は後続母音が、長母音が続く場合では後続母音と生起位置が有意な要因であった。ポーズが無い場合も学習レベルによらず、摩擦音の有声性と調音点が最も強い要因であり、他には後続母音が有意な要因であった。長母音が続く場合は、中級学習者に影響を与える要因は摩擦音の有声性と調音点であったが、初級学習者では生起位置であり、要因が異なっていた。ポーズが有る場合と異なり、要因による差は見られたが、長さの不自然率には学習レベルによる有意な差はなかった。遅延反復課題では、最も影響を与えている要因は両学習レベル共に単音の正しさであった。単音の正しさ以外の要因は、初級学習者では後続母音と生起位置、中級学習者では摩擦音の有声性と調音点及び生起位置であった。遅延反復課題では長さの不自然率における学習レベルは有意であった。

第6章は、破擦音が含まれている拍を生成する場合の結果と考察である。文字の読み上げ課題では、ポーズが有る場合、最も影響を与えている要因は後続母音であった。後続母音以外の有意な要因は、両学習レベル共に破擦音の有声性と調音点であったが、破擦音を含む拍の長さの不自然率には学習レベルによる有意差はなかった。ポーズが無く短母音が続く場合、学習レベルによらず後続母音が最も強い要因であり、初級学習者では生起位置も有意な要因であった。長母音が続く場合は、中級学習者に影響を与える要因は後続母音で、初級学習者では生起位置であった。このように異なる要因による差も見られたが、長さの不自然率に学習レベルによる有意差はなかった。遅延反復課題では、初級学習者には拍数が、中級学習者には破擦音の有声性と調音点が最も強く影響を与えている要因であった。学習レベルについては、破裂音、摩擦音と同様に有意であった。

第7章では、4章から6章の3つの阻害音の結果を比較、考察している。文字の読み上げ課題ではポーズの有無により、3つの阻害音の不自然率は学習レベル間に有意差はなかった

別紙 1-2 論文審査の結果の要旨

が、不自然率に影響を与えている要因はそれぞれ異なっていた。要因については、有声性、後続母音の音質と長短、生成方法の違い、ポーズの有無、学習レベルにより障害音が含まれている拍の長さが影響を受けていることを明らかにしている。遅延反復課題の結果については、3つの障害音の不自然率は学習レベルにより有意な差があった。不自然率に影響を与える要因については、学習レベルに共通しているのは、摩擦音では単音の正しさであった。学習レベルにより異なるのは、初級学習者では、破裂音と摩擦音で生起位置、破擦音では拍数が、中級学習者では、摩擦音と破擦音で有声性と調音点が有意な要因であったことである。

第8章では、韓国語の影響と収録方法の違いに焦点をあて、3つの障害音を含む拍の長さの不自然率について考察している。韓国語の影響については、語頭および語中環境での韓国語の障害音の振る舞いに注目して考察した結果、その影響は障害音により異なっていたが、影響は大きくないことを明らかにしている。収録方法の違いでは、破裂音と摩擦音では遅延反復課題より文字の読み上げ課題の方が不自然率は高く、このことについては学習者の心内辞書における音韻情報が正しくない可能性が考えられるとしている。

第9章では、本論文の結論と今後の課題を述べている。

[本論文の評価]

本研究は、韓国語を母語とする日本語学習者が抱える音声上の特徴の中でも、3つの障害音に焦点をあて、特に障害音を含む拍の長短に注目して分析している点、分析に多くの要因を設定し、膨大な収録データを統計的に検定し、細かく調べた上で有意な要因、要因間の影響の大きさなども結果として得ている点が評価された。同時に、設定された研究課題を基に、次のステップにつながる基礎的な研究である点についても評価できるという意見もあった。

審査では、論文の構成、実験方法、分析方法、内容に関して質問、コメントがあった。

論文の構成については、各章のまとめをもう少し整理し、簡潔にまとめるべきであること、また、全体的には分析要因が多いため解釈に困る場合があり、議論が収束していかず分かりにくくなっているという指摘があった。このことを受け、4章から7章までを修正している。実験方法については、2通りの課題を行っていることはよかったが、収録方法の違いによる不自然率の差について、聞くプロセスを踏まえた説明が欲しかったというコメントがあった。分析方法では、ポーズの有無により結果を分類しているが、ポーズの有無がそのまま語頭、語中環境として扱えるのかという疑問もあった。また、統計的検定に分類木分析を使ったことで、逆に結果が細かくなりすぎ却って解釈に困る場合があったのではないかとこの指摘も出された。分析内容については、質的な考察をより深め、なぜ不自然率が高くなるのか、特定の語だけ突出して不自然率が高くなる理由などについて考察して欲しかったというコメントもあった。今後の課題については、長さの分析は大事であるが、日本語教育へ貢献するためにそれをどう進めるかという視点を書くべきであったとの指摘があった。

別紙 1 - 2 論文審査の結果の要旨

しかしながら全体的には、韓国人学習者の日本語阻害音を含む拍の生成に影響する要因について明らかにしたことで日本語音声教育への基礎的なデータが提供でき、今後の応用が期待できる価値のある研究として評価される。

以上の結果から、審査員は全員一致して本論文が博士学位論文としてその水準に達していると判断した。